

## 愚堂國師の禪

伊藤古鑑

わが妙心の一流、六祖のもと、景川、特芳、悟溪、東陽の四派あり、なかにも東陽の一派まことに寂寥として振わず、愚堂の出ずるにおよんで、東陽の一派にわかに興り、その當時の禪界を風靡した。愚堂なるものの禪、いずれのところに、その特質が秀でて、かくも隆盛を見るに至つたのか、それを研討するのが、この論文の趣旨である。

しかも、妙心開山六百年の大遠忌が明年、修せらるるときに當り、その中間三百年に出世した大宗匠、愚堂を研討して見るのも、またわが妙心寺派の宗勢を想い出す上に、なにか役立つものがあるのではないかと思ひ、ここに筆を執ることにした。

また私は、幸いに愚堂派下のものであり、愚堂を開山とする小庵に住すること、ここに殆んど四十年、しかも愚堂の俗姓を名乗つているものであつて、その因縁極めて深きものがあるのであるが、いま、ここに臆面もなく愚堂を論及することは、或は禮を失するかも知れないけれども、しばらく學究の身として宥恕を乞ひ、併せて世の識者の叱正を待つ次第である。

愚堂の傳記を書いたものは、『大圓寶鑑國師語錄』下卷にある國師傳、それに多少加筆したものが『宗統八祖傳』のなかの愚堂寔禪師傳である。これは共に、愚堂の嗣子雪潭豐玉の筆になつたものである。また別に『大圓寶鑑國師年譜』として一卷、寫本として傳わつている。これも雪潭の筆で、安山玄永が考證している。安山も愚堂の嗣子であつて、この『年譜』は信用の出来るものと思う。一歳から八十五歳まで、詳細なる記事であるから、愚堂の生涯を知るには好箇の資料である。その他、師蠻の『本朝高僧傳』四十四の「濃州大仙寺沙門東寔傳」を始め、愚堂に關係ある諸寺の資料等もあるが、いまこれらの資料に依つて主なる出來事を表記して見ることにした。

天正五年（一） 四月八日、美濃伊自良村大森に生る。父は伊藤紀内（或は記内とも喜内とも書く）母は齊藤家の家臣の女というも異説あり。

天正十年（六） 歳） 雲居希膺生る。

天正十一年（七） 歳） 母、梵呪を教ゆ、よく記誦す、郷人島戸作右衛門、愚堂の家の零落を恤んで、養うて愚堂を子となすとも傳う。（『年譜』）

天正十二年（八） 歳） 父、携えて隣里の東光寺陽德軒に行き、宗固首座に就て字を習わしむ。

天正十五年（十一） 歳） 愚堂、長ぜし爲め、遂に陽德軒に留まりて僧業を習う。

天正十七年（十三） 歳） また作詩を習うて、天分をあらわす。（春鐘の詩『寶鑑錄』に載す）

天正十九年（十五） 歳） 東光寺五世瑞雲宗呈（以安智祭の法嗣）を禮して祝髮受具、東寔を以て名すく。

文祿元年（十六） 歳） この年、初めて一箇の疑團を起し、坐臥安からず。

文祿四年(十九歲)

この年より諸方行脚に出ず。先ず勢北長島に行き説心和尙に參ず。

慶長二年(二十一歲)

二月二日、父伊藤紀内逝く、仲陽以春居士という。

慶長三年(二十二歲)

野州興禪寺に行き、物外和尙に參ず。八月十八日豊臣秀吉歿す。

慶長五年(二十四歲)

この年、關ヶ原合戦の爲め野賊横行、愚堂は大愚と共に加納を過ぎ、賊の隊中を通過して、賊をして驚かしむ。この年より東光寺瑞雲和尙に侍す。

慶長六年(二十五歲)

瑞雲和尙極めて惡辣を以て愚堂に接す。忍飢勞苦、言語に絶す。終に病んで死に頻す。却つて工夫大に精彩を加うという。

慶長七年(二十六歲)

四月二十三日、母鷲見氏歿す、花因現成大姉という。

慶長八年(二十七歲)

至道無難生る。

慶長十年(二十九歲)

播州三友寺(今の江嶋寺)に行き、南景和尙(東漸宗震の法嗣にて、庸山景膺と同參、この法孫に盤珪國師出ず、南景岳、雲甫祥、牧翁祖、盤珪永琢と續く)に參じ、同志と伴を結んで苦修、遂に大悟し、その投機の偈として、「自笑十年行脚事、瘦藤破笠扣禪扉」、元來佛法無多子、喫飯喫茶又着衣」という。

慶長十一年(三十歲)

説心和尙、駿陽清見寺に移る。依つて愚堂をその版首となす。また臨濟寺に行き鐵山和尙にも參ず。

慶長十二年(三十一歲)

雲居、大愚、了堂、洛浦と共に伴を結んで仙臺覺範寺に行き、虎哉和尙に參ず。この年、鐵山和尙、駿府より法山靈雲院に移る。愚堂またこれに従う。

また備前の大安寺に行き、天長和尙に謁す。天長、温情を以て迎う。

また法山に歸り、聖澤の庸山和尚に謁す、庸山、惡情を以て迎う。ここに於て、庸山屋裏の宗旨を奪却せんとして苦修す。

慶長十四年（三十三歳）

諱を景哲と改む、後また舊諱に復す。

慶長十五年（三十四歳）

庸山和尚、愚堂の號を賦して附與す。

慶長十六年（三十五歳）

庸山和尚、印記を書して愚堂に附與す。

慶長十七年（三十六歳）

轉位して本山第一座となる。

慶長十九年（三十八歳）

濃州に行き、小島の瑞巖寺に住す。兼ねて北方の慈溪寺をも勤む。

元和三年（四十一歳）

小島より和知に赴き、正傳寺に住す。

元和七年（四十五歳）

始めて江府に行き、石川總輔等の歸依を受け、小庵を構えて「臨濟錄」を講じ、「今臨濟」の稱を得、後、小庵を體道に付して美濃に歸る。

九月、受業師陽徳固公示寂す。依つて正傳寺の境内に堅法院を創む。蓋し堅法は固公の號なり、撫育の恩に答う。

正傳寺の主務を大疑に付し、これより細目の大仙寺を興し、東陽和尚挿草の道場を守らんとす。

寛永元年（四十八歳）

江府に行き、春日局の歸依を受く。

伊達政宗、愚堂を瑞巖寺に迎えんとするも、これを辭して行かず。

寛永二年（四十九歳）

また江府に行き、東叡山に登り、慈眼大師に謁す。

寛永三年（五十歳）

七月十七日、庸山和尚示寂す。壽六十八、景暉をして聖澤の院事を續がしむ。

寛永五年（五十二歳）

愚堂、妙心に瑞世す。

寛永七年（五十四歳）

東陽和尚の『宗門正燈録』を刊行し、また續いて『禪林類聚』『聯珠詩格』等を醵刻す。

寛永十年（五十七歳）

正月、東光寺瑞雲和尚示寂す。

寛永十二年（五十九歳）

十二月二十四日、愚堂再び妙心寺に住す。上堂の語、『寶鑑録』に載す。

寛永十三年（六十歳）

四月十三日、愚堂を仙洞御幸の間に召され、法式道場を嚴備して、盛大なる陞座説法をなさしむ。（このときの文書の往復は、華山寺寶物の書翰にあり）

寛永十四年（六十一歳）

また江府に行く、將軍家光、愚堂を迎えんとするを聞き、潛かに遁れて美濃少林寺に入る。

寛永十五年（六十二歳）

この春、大仙寺落成して盛大なる落慶式を行う。（一説には寛永十三年という）

この年、後水尾上皇、愚堂を仙洞に召す、對御の法要、『寶鑑録』に載す。

寛永十八年（六十五歳）

十月、江府に行く、途に至道無難、從うて遂に出家得道す、時に年四十。（異説多し）

寛永十九年（六十六歳）

三月、大仙寺に歸る。この年、三月より五月に至るまで大飢饉にて餓死するもの多し。

愚堂、大仙寺の藏を開いて飢饉を救う。（『大仙寺夜話』）

寛永二十年（六十七歳）

十月朔日、三度、妙心寺に住す。上堂の語『寶鑑録』に載す。

正保元年（六十八歳）

また仙洞に入つて説法す。これより以後、しばしば禁闕に出入せらる。

一絲文守に印記を授く。（『正法山誌』）

正保二年（六十九歳）

四月十九日、宮本二天、通稱武藏歿。年六十二、一説に六十四。（『日本禪宗年表』）武藏は愚堂に參ずというも確たる資料なし。大仙寺には、傳説として、武藏の坐禪石、二天圓

明の瀧あり。(『大仙寺夜話』)

十二月十一日、澤庵宗彭示寂す、壽七十三。

三月十九日、一絲文守示寂す、壽三十九。

夏、江府に赴く、諸大名の館に在りて多くの信者を化す。

慶安元年(七十二歳) 豊後に養徳寺を創建す、崇山をして住せしむ。(一説には正保二年という)

この年、愚堂の頂相を法眼探幽が圖す。愚堂自贊して、「這箇是什麼、實相元來非諸相、

咄、這箇是什麼形相」と。(『大仙寺所藏』)

慶安二年(七十三歳) 至道無難に印可す。時に年四十七。(『近世禪林僧實傳』)

慶安四年(七十五歳) 愚堂、豊後の養徳寺に行く。(『養徳通鑑』第一)

伊勢に中山寺を創建して、これに住す。

承應二年(七十七歳) 無着道忠生る。

承應三年(七十八歳) 四月、中山寺を發し、江府に往き、松平直次の別館に寓す。

江府に正燈寺を創建す。

七月、黄栗隠元來朝す。

明暦元年(七十九歳) 正燈寺に移り住す。

十月、美濃に歸り、眞正寺に住して、その頽廢を復興す。

明暦三年(八十一歳) 五月、賀州山中温泉に行き、たまたま大愚和尚と會す。

萬治元年(八十二歳) 美濃伊自良に高井寺を創建し、固公及び考妣の菩提に酬ゆ。(高井寺は明治維新のとき廢寺)

となる)

この年、皇帝、愚堂を召して心要を問う。〔寶鑑錄〕に對御の法語を載す。この冬、山科華山寺に入る。華山寺は、もと天臺宗なりしが、住持雷峰、元和年中愚堂に參じ、この年、後水尾上皇の内勅に依り、臨濟宗に轉ず。

萬治二年(八十三歲)

八月八日、雲居希膺示寂す、壽七十八。

九月十二日、妙心寺開山三百年遠忌豫修、四住妙心となりて導師を勤む。

萬治三年(八十四歲)

愚堂、仙洞に詣る。〔寶鑑錄〕

六月、伊勢路を経て、美濃の眞正寺より大仙寺に歸る。

寛文元年(八十五歲)

夏の始め、美濃の大仙寺を發し、江州妙感寺の修繕を見て、山科華山寺に入る。

十月朔日、華山寺にて示寂。

### 三

愚堂の傑出せる點は、先ず第一に生れながらの法器であつたことに起因する。偉大なる人物は、誰でも、その幼少の頃には苦境がつきまとつてゐるものであるが、愚堂もたしかに、その出生からして、あまり恵まれていなかった。

『年譜』に依ると、中條播磨守が美濃の伊自良を鎮した時、母が播磨守の侍妾となり、その妊めるに及んで、門客の伊藤紀内に嫁せしめたというてゐる。また一説には加州朝倉家の實子といひ、その臣に伊藤紀内があり、朝倉が戰死したので、愚堂を孕んだ母は記内と結び、落ち人となつて伊自良に棲んだものともいうてゐる。〔養徳通鑑〕別記)また、この外にも説がある。

とにかく、愚堂の父母は落ち人であつて、その生活にさへ苦んだものとも見える。それを見るに見かねて、郷人の島戶作右衛門が愚堂を養つたとも傳えているが、しかし、禪門に縁があつて、東光寺陽徳軒の宗固首座に愛せられ、この首座が實に立派な人で、この人にして愚堂を大成せしめ、愚堂もまた、この人の深恩に感銘していたことは重々である。

愚堂の軀幹極めて魁偉、廣額豐頬、耳輪厚くして長く、眼光まばゆきばかり輝き、見るもの覺えず拜服せしめたと傳えている。

「寔容貌魁偉、横額豐鼻、耳輪厚而長、眼眶稜而光、見者心服」(『本朝高僧傳』四十三、全書本六二〇丁)

愚堂の木像、頂相は多く傳つているが、なかにも華山寺の木像の如きは實に立派なもので、愚堂の全身は、その下に葬られている。後、明治年間、故ありて改葬せられたとき、その軀幹極めて大きいように思われたという話も聞いている。また『寶鑑錄』を讀んで見ると、後水尾上皇が愚堂を召して奏對玄談精微、皇情殊の外喜び給うて後、源内府通村に語つて曰く、

「道貌奇勝、辭氣純粹、眞禪林巨材也」(『寶鑑錄』下卷三八丁)

といい、また或るときは、

「上皇起目送、且謂通村曰、今時碧眼胡僧也」(『寶鑑錄』下卷三九丁)

ともいわれたとあるが、實に達磨そっくりの體軀であつたかも知れん。その頃の愚堂は、その當時の第一人者でもあり、最も圓熟した宗匠で、いかに上皇の前に出ても、臆せず、法の第一義を提唱せられたものと思われる。

後水尾上皇の御信仰に就ては、辻善之助氏の『日本佛教史之研究』續篇四八五丁已下に委しく論ぜられているが、要するに、御歸依の僧としては、一絲文守、澤庵宗彭、鳳林承章、雲居希膺、愚堂東寔、龍溪性潛などを擧げ、なか

にも愚堂に於ては、寛永十三年、院御所に於て特に法式を備えて、陞座說法せしめられたことは特筆すべきことであつたといわれている。私も嘗て華山寺に行き、その往復文書を見、その說法圖を見て、その盛儀の法會であつたことに驚いたことがある。その說法圖は、川上孤山氏の『妙心寺史』下巻、その他『妙心寺六百年史』、古田紹欽氏の『愚堂、無難、正受』にも載せられているが、その原本は恐らく、この華山寺の寶物に依つたものであらう。

また愚堂八十四歳のとき、愚堂よりして皇上の仙洞に詣り、曰く、

「聖算漸高登<sup>上皇六十五歲</sup>、況臣日薄<sup>西山</sup>、他時朝見難<sup>期</sup>、由<sup>是</sup>來候、上皇感<sup>喜</sup>之、奏對移<sup>景</sup>、因<sup>臥</sup>御座之側、鼻息胸<sup>胸</sup>、上皇觀<sup>其老而無餘想</sup>、道容殊絕、待<sup>其醒</sup>不<sup>肯起</sup>、師既寤言<sup>老倦猿偃息</sup>、便辭退」(『宗統八祖傳』三四丁)

といえるが如きは、實に愚堂ならでは出来ないことで、無心な姿をあらわし、少しも體裁をよそわざるところ、天然の禪匠というても過言ではなからう。師蠻も、これを『本朝高僧傳』に贊して、次ぎのようになっている。

「實鑑國師出<sup>於</sup>祖道乾枯之秋、主<sup>盟</sup>大法、於是雲居膺、大愚築、一絲守諸師相繼而出、宗風起禪化行、此又國師先倡之續也、且夫假<sup>寐</sup>干降龍之榜、鼻雷震<sup>天闕</sup>者世復稀<sup>聞</sup>、昔育王崇祐禪師、明太祖屢召對、或時假寐、鼻息有<sup>聲</sup>、隣坐引<sup>裾覺</sup>之、太祖嘆曰、此老人無<sup>機心</sup>、誠善知識也、與<sup>國師</sup>之譽厝<sup>有</sup>遺類<sup>矣</sup>」(『本朝高僧傳』四十四、全書本六二二丁)

かかる禪匠は、もちろん修行の結果ではあらうが、それよりも、過去世の宿殖深厚により、生れながらの法器であつたことに起因するものと私は信ずる。

#### 四

しかし、いかに天然の禪匠とはいえ、それに至るまでには、實に血滴々の修行を積んだもので、愚堂も、その修行時代には善き伴侶を得て切磋琢磨し、しかも明眼の宗匠を歴訪して、宗旨というものを、しつかりと擷んで、最後の牢關を徹底的に透過し得たというべきであつたらう。そこに、愚堂の絶大なる識見を具し、高く眼を著けた禪匠となり得たもので、その修行に第二の傑出した特異性があらわれているものと思う。

愚堂の修行時代のことは『年譜』に、あまり委しく出ていないが、とにかく十六歳のときに、すでに生死の問題に關して一の疑情を起した。若し死後われらの心身が無いとしたならば、誰のために化道するか、若し有りとしたならば、その形跡を見ないではないかという疑情であつて、この問題の解決のために寢食を忘れたというのである。それから十九歳、始めて行脚に出で、諸方の善知識に歴參せられ、その當時の銅頭鐵額といわれる雲居、大愚、了堂、洛浦、大雲、回天などと伴を結んで、江海を遊び、山川を涉り、師を尋ね道を訪うて參禪をなしたのである。

また自坊に歸ればとて、決して甘く迎えられたのではなく、裨劑一碗に數日の勞といつたわけで、本師瑞雲は、夏の盛りに茂公(千英といひ、後に東漸宗震の法を嗣ぐ)と共に池を掘らしめたといひ、また冬にもなれば、傷寒の疾にかかり瀕死の重態にもなつたというのである。故に愚堂も往事を追憶して、「師曰、我昔時、在瑞雲處、忍飢勞苦、雲不顧也」(『年譜』五丁)というているが、これが宗門の親切というものであつたらう。

もとより、瑞雲のところには、その近くに受業師宗固首座があり、その指導よろしきに依つて、愚堂に修行の隙を與えず、次ぎから次ぎへと撥草參玄せしめたのである。しかも、その修行に進むや、誰の法を嗣ぐべきやも慮り、最後に聖澤の本庵に行き、庸山の毒手に觸れしめたのも、この宗固首座であつたというのである。すなわち『年譜』三十一歳の條を讀んで見ると、宗固首座が京に上り、聖澤の庸山に向つていうには、

「吾東陽派下、以三和尚爲嫡流、然<sup>テ</sup>承嗣之人、寔者吾家駿駒子也、可惜、至<sup>リ</sup>以三千里良能、一旦放<sup>置</sup>

他權中也」〔年譜一九丁〕

と、實に庸山は東陽派下の嫡流である。東陽英朝、大雅端匡、功甫玄勳、先照瑞初、以安智察、東漸宗震、庸山景膺と相承けているが、未だ庸山には承嗣の人がない。この愚堂こそその人なりと宗固首座が説けば、庸山も是なりと信じ、急に天長下にあつて修行していた愚堂を召したといふのである。天長は悟溪下興宗の玄孫であつて、愚堂を迎へるに温情を以てし、その法嗣にせんとの意があつたと傳えている。若し愚堂にして、その意ありとせば、悟溪の東海派下の法系に屬する人となつたかも知れない。然るに宗固首座は東陽派下の人であつたがために、法を重んじて、その本庵の庸山和尚を動かしたのである。

もとより、庸山と愚堂との師資が機縁相契わねば致方がないが、よく愚堂は、庸山の痛棒を喫して、その法器を體究練磨し、庸山また愚堂の法器を見て、辛辣なる手段を弄し、惡毒を頭上よりひつかけたといふので、ここに全く扶桑第一の毒華を開かしめ、上皇天皇の尊貴に對してさえ、法の爲めには親切の限りを盡されたのである。すなわち、上皇に對しては、

「一日、上皇下御座、投誠發露睿儀、請直垂開示、師學似本分一著子、上皇猶豫未決、師振威打座一擧曰、曷獲疑著麼、上皇驚動忽有省」〔宗統八祖傳〕三〇丁〕

とあり、眞に達磨と梁の武帝との商量の如き感がある。また天皇に對しても、

「今上皇帝、召師於禁闕、宣問心要、師奏曰、夫一大事因緣、不同輒紅輕襪、踏地怕痛之論、直須深發睿信、著實省察、自然到道德之域、伏冀、恢弘廣大之慈心、覆燭億兆之黎庶、若又高居尊位、日用專任嬌倨邪僻之情、則其感地獄之業、殆劣於卑賤者、譬如墜自高者必殞命、而自低者鮮有此累、帝肅容拳拳、深以爲然、其持論勁正、尊卑一節皆類此」〔寶鑑錄〕下卷四〇丁〕

といい、尊貴の身は却つて墮獄の罪重しと説いているが如きは、實に法の前には、少しも遠慮しなかつたという愚堂の態度がはつきりと窺える。

すでに、上皇天皇の尊貴に對してさえ、このありさまであつたから、一般の會下に對する接得振りは、極めて惡辣なものであつた。

「平生施惡辣手脚、不<sub>レ</sub>少假<sub>二</sub>人情<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>躍<sub>二</sub>倒階下<sub>一</sub>、棒下蒙<sub>レ</sub>瘡痕<sub>上</sub>、所以學者多望<sub>レ</sub>崖而退、居恒接<sub>二</sub>納四來<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>專<sub>二</sub>威儀禮樂<sub>一</sub>、然江湖之飽參自然服膺耳」(「宗統八祖傳」三三丁)

これらに依つて考えて見ると、愚堂の接得振りは惡辣の手脚を施したもので、容易に許さず、室内より追い出し、階下に突き落すなど、雲水に、なまきずの絶え間がなかつたというもので、まことに開山無相大師の接得振りそのままを現出したものと見ても良からう。

## 五

次に愚堂の傑出せる第三の點は道眼圓明ということである。すなわち愚堂の禪は開山無相大師そのままの正法禪であり、東陽英朝一派の正燈禪であつて、純の純なるものであつた。前にもいえる如く、その室内は極めて峻烈であつて、末代に相應する念佛禪でもなく、従つてまた口頭禪でもなく、文字禪でもなかつたのである。

愚堂の晩年に黃檗の隠元が支那から來朝してきた。隠元が妙心を乗り取ろうしたのか、妙心の或る一派の人が隠元を利用して宗旨に喝を入れようとしたのか、その點は、はつきりしないが、とにかく、その間の事情は委しく川上孤山氏の『妙心寺史』下卷二七七丁、古田紹欽氏の『愚堂、無難、正受』四九丁にも論じている。

隠元の來朝は承應三年七月であつて、妙心としては三百年遠忌五年前であつた。遠忌の準備として、諸堂伽藍の新

築改築のどさくさのときであつた。すでに遠忌の準備は承應元年に始まり、法堂、方丈、庫裡、茶堂(寢室)及び玉鳳院などを造營すべく決議し、これが工事に着手し、何れも萬治二年の春までに竣工することになつていた。

そのとき、隠元が來朝したので、この隠元を妙心に拜請し、遠忌の導師となし、關山の宗風に一大革新の氣分を加えんとした輩もあらわれたのである。すなわち、その代表者は龍溪、獨照、提州などといわれ、なかに龍溪の如きは、その畫策に最も狂奔した一人であつたと思われる。

然るに、これ等の畫策に反對し、妙心は妙心として關山一流を相承し、法統を長く安泰ならしめたものは、實に、この「幸いに愚堂の在る有り」であつたといわねばならん。すなわち『年譜』明曆元年乙未、七十九歳の條に、

「隠元和尙、從<sub>レ</sub>明國<sub>二</sub>航海來朝、將<sub>レ</sub>蒙<sub>三</sub>公家許<sub>二</sub>入<sub>レ</sub>江府<sub>一</sub>、關山門下、在<sub>レ</sub>府諸寺相議、欲<sub>レ</sub>請<sub>三</sub>元於天澤<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>闔府瞻禮<sub>一</sub>、梵竺<sub>二</sub>印代<sub>一</sub>衆詣<sub>三</sub>正燈<sub>二</sub>曰、和尙幸在<sub>三</sub>斯地<sub>一</sub>、宗門僉同議、未<sub>レ</sub>審、尊意如何、師、佛然徐曰、我聞隱元念佛是否、印曰、否、蓋憚<sub>三</sub>嚴顏<sub>二</sub>也、師曰、雲居已念佛、今元亦念佛、縱墮<sub>三</sub>在八萬泥梨<sub>二</sub>底、吾這裡祖師禪也、元、他日於<sub>レ</sub>吾祖門<sub>一</sub>、將有<sub>レ</sub>神乎、又有<sub>レ</sub>害乎、未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知也、然雖<sub>レ</sub>如此、孤論難<sub>レ</sub>持、且任<sub>三</sub>衆議<sub>二</sub>耳<sub>一</sub>」(『年譜』三八丁)

といい、また愚堂が隠元を議したことは、無著の『正法山誌』第七卷にも委しく出ている。そのなかの一節に曰く、適國師爐前向<sub>レ</sub>火從容謂曰、龍溪等年稍老矣、何復不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>大體<sub>二</sub>耶、山僧今日、我國禪門大老、雖<sub>三</sub>德不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>禱、隱元何不<sub>三</sub>一來講<sub>二</sub>相見之禮儀<sub>一</sub>耶、異國僧不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>法門規則<sub>二</sub>也、如此、山僧自續<sub>三</sub>關山正宗<sub>一</sub>、何遽往見<sub>レ</sub>他、作<sub>三</sub>沙彌童行之爲<sub>二</sub>耶<sub>一</sub>」(『妙心寺誌』一六三丁)

と、これに依つても愚堂の風格の一片を知ることが出来る。恰かも隠元を眼下に見くだして、我がところに、相見の禮儀を講ぜざる不所存ものといった言動は、愚堂ならではないえないところであろう。愚堂が三百年遠忌の導師を勤めたとき、その香語に、「二十四流日本禪、惜哉大半失<sub>三</sub>其傳<sub>一</sub>、關山幸有<sub>三</sub>愚堂在<sub>一</sub>、續焰聯芳<sub>三</sub>三百年<sub>一</sub>」と唱えんとした

とき、大愚は、

「第三句、須<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>兩字<sub>一</sub>、愚堂云如何、大愚曰、大愚亦在、何得<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>幸有<sub>一</sub>愚堂在<sub>一</sub>、愚堂笑肯、遂改曰、關山幸有<sub>二</sub>兒孫在<sub>一</sub>」(『正法山誌』第七卷一五一丁)

と、その識見の高邁なること、實に驚くべきものがある。これは決して空虚な見識でなく、一時的の虚榮を張つたというのではない。眞に愚堂の肚裏を打ち割つての話である。この關山の一流は、この愚堂一人に依つて立つてゐるという絶大なる自信力から迸り出た一句であつたと思う。

また隱元としても、これに劣らず、隱元が妙心に來り、開山塔に於て拜をなさず、

「關山道眼明不明、未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知、無<sub>レ</sub>拜而可也」(『正法山誌』第七卷一六三丁)

といつたとあるが、これが果して彼の肚裏か、ただ狂妄誇大の振舞を演じたものかも知れないが、これに依つて愚堂の怒りに觸れたことは事實であつた。

愚堂の偽らざる肚裏というものは、嘗て後水尾法皇が畫工に命じて、愚堂の像を圖せしめ、それに自贊するやうに、烏丸光廣を中使として、愚堂に詔があつたのである。すると、愚堂は、これに對して恐懼し、「老僧無德、豈有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>耶、只詔雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>拒焉、且以<sub>二</sub>和歌<sub>一</sub>作<sub>レ</sub>贊、贊曰、あし原や絶えてひさしきのりの道踏みわけたるはこの翁なり」

と、これに依つても、愚堂の尊き信念の程が窺われ、その當時の第一人者を以て自他共に許していた感がある。そこで法皇も、

「法皇嗟賞、久<sub>レ</sub>之曰、朕曾詔<sub>二</sub>一絲<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>續<sub>二</sub>他血脈<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>他有<sub>一</sub>此氣象<sub>一</sub>也、非<sub>二</sub>愚堂<sub>一</sub>者、豈能爲<sub>二</sub>此語<sub>一</sub>耶」(『正法山誌』第七卷一五一丁)

と宣べられたということである。

## 六

一絲は岩倉具堯の三男で、慶長十三年二月二十七日の誕生である。十四歳より萬年山雪岑に侍し、十九歳にして榎尾山賢俊を拜して剃染し、後ち堺南宗寺の澤庵に參じ、孜孜として請益晝夜を捨てず、概ねその要訣を盡したのとことであつた。

後水尾上皇、一絲の道譽を聞き召され、寛永八年の春、一絲を引見して禪要を諮問せられたとのことであるが、この時代は朝暮の間が圓滿を缺いていたので、一絲は「身はたとえ佛門にあるとも、よく勤王の宿志を遂げん」と奏上し、それより以後、しばしば禁闕に出入し、烏丸光廣等と深交を結んだので、幕府の監視も常に一絲の身の上に注がれたというわけであつた。これらのことは、辻善之助氏の「日本佛教史之研究」七〇一丁「一絲和尚と朝暮關係」並に『同上』續篇五〇二丁「一絲和尚と朝暮關係補遺」に詳論されている通りである。

そして、この一絲の嗣法についても、澤庵に嗣がずに、愚堂に嗣いだしたのも、勤王の關係であるといわれ、前に擧げた無着の『正法山誌』に依れば、上皇がその血脈を續がしめたようにも説いている。その印状は、また『正法山誌』にそのまま載せている。

「祖師云、不<sub>レ</sub>因<sub>レ</sub>師悟者萬中希有、若自己以<sub>レ</sub>緣會合得<sub>レ</sub>聖人意、卽不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>善知識、文守禪人者乃其人也、早明<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>自己<sub>レ</sub>竟、不<sub>レ</sub>因<sub>レ</sub>人求、此故坐<sub>レ</sub>石上<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>樹下、閑居過<sub>レ</sub>日者年久矣、老僧會一見、早知<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>過量見<sub>レ</sub>矣、他日狹路相逢、直以<sub>レ</sub>向上鉗鎚、驗<sub>レ</sub>之恰如<sub>レ</sub>金剛不<sub>レ</sub>破壞、又雖<sub>レ</sub>事事絕<sub>レ</sub>陷虎機、猶具<sub>レ</sub>師子返擲機、又以<sub>レ</sub>平常語話、子細勘<sub>レ</sub>驗之、與<sub>レ</sub>老僧見處<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>異、如<sub>レ</sub>兩鏡相照、於<sub>レ</sub>中無<sub>レ</sub>影像、眞吾家種草也、他日建<sub>レ</sub>法幢<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>宗旨、

運<sub>三</sub>濟往來<sub>二</sub>報<sub>三</sub>佛祖恩<sub>一</sub>、實不<sub>レ</sub>辜<sub>三</sub>負老僧意<sub>二</sub>祝祝<sub>一</sub>」(『正法山誌』第二卷三五丁)

このように愚堂は、一絲に印狀を與えているが、しかし、一絲の文字禪には反對していたようである。一絲は三十九歳で示寂しているけれども、その法諱の示すが如く文守であつた。『佛頂國師語錄』を始め『緇門寶藏集』『大梅山夜話』『佛祖百首頌童行談』『永明壽稱師垂誠註解』などを残しているが、その生涯あまりにも文筆を弄しているのを嫌つて、愚堂は次ぎのようにも「年譜」にうっている。

「師嘗曰、一絲先<sub>レ</sub>吾而死、吾法之幸也、渠一生有<sub>レ</sub>挾<sub>三</sub>文字<sub>二</sub>而逸<sub>中</sub>師之恩<sub>一</sub>、若在<sub>下</sub>與<sub>三</sub>槩山徒<sub>二</sub>相結<sub>一</sub>、必可<sub>レ</sub>作<sub>三</sub>書牘往返<sub>二</sub>數<sub>一</sub>、想厥絲兄死全<sub>二</sub>一世之名<sub>一</sub>亦幸乎」(『年譜』三九丁)

また愚堂は、一絲の持律禪をも嫌つていた。一絲は槓尾山賢俊律師に従つて毘尼を學び、嚴肅なる戒律奉持者であつた。しかし、愚堂は必ずしも戒律を主とせず、戒律已上に自在の心境を持つていた。

「僧問、和尚爲<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>依<sub>三</sub>諸佛律儀<sub>一</sub>、師曰、我是諸佛已前人」(『宗統八祖傳』三三丁)

といえる如く、愚堂は「諸佛已前人」を悟得していたので、豈敢えて諸佛の造作する戒律などを持つる必要を認めなかつたわけである。また禪は、臨濟大師の示せるが如く「無依の道人」であつて、諸佛の律儀に依るべきではない。律儀軌則の末節に拘泥することを嫌うたことは、すでに開山無相大師の示されている通りであるが、しかし、これを後世に於て用いるのは、下根劣智のものを誘引せんが爲めに、しばらく規則を建て、威儀を正しくするのみである。大法を手に入れ、道と一體になり畢れば、「大用現前、規則を存せず」であつて、その一擧手一投足が、直ちに道のあらわれとなり、法と合致するものというので、別に、外に法を建て、律儀を論ずる必要はないというのが愚堂の意圖であると思ふ。

また末世相應の法というて、念佛禪がその頃、流行していた。その主唱者は雲居希膺であつて、彼は幼時、毘沙門

堂に遺棄せられ、その里人に拾われ、愛育せられた因縁に依り、雲居の一生は毘沙門天を念持佛となし、人にも念佛の易行を説いたことであつた。すなわち、將軍家光の夫人に請ぜられ、禪門易行の安心として念佛禪を勧め、阿彌陀佛の尊號を三幅まで大書して呈したということであつた。また雲居には有名なる『雲居和尚往生要歌』がある。その當時は盛んに諷誦し、上下を大に風靡したものであるが、しかし、これらに就ては、その當時、法山諸老に於ても相當に非難するものもあつたが、これも在家衆生の濟度に用いた方便であつて、その根柢に於ては己身の彌陀、唯心の淨土を説いたもので、かの六祖慧能大師の『壇經』に示せる趣旨と大差はない。

雲居は修行中、絶食不眠、禮佛誦經、日々毘沙門、觀音の神呪を誦すること十萬遍、密に大士の靈告を受けたこともあるので、その入道の方が、このようであつたが爲めに、その化道の方も念佛禪を主とし、禮拜懺悔の行をも専修して、禪林の規矩は至つて嚴肅に守られていたとのことであつた。

愚堂は、この雲居の念佛禪には、あまり心よく思つていなかったところへ、また隠元の黄檗禪が傳わり、念佛禪を説いたので、不愉快に思つたに相違ない。黄檗禪は、支那明末の念佛禪であつて、末代相應の禪と稱するも、これは正法禪の墮落であつて、正燈禪からいへば、當然破棄すべき性質のもので、愚堂が佛然として色をなし、これを排斥したのも無理はない。

## 七

愚堂は、このように道眼圓明であつて、純の純なる正燈禪を擧揚していたのであるが、また佛教の教理に對しても、はつきりとした見解を持していたことは、その第四の傑出せる點であると思う。すなわち、佛教を小乗と中乗と大乘とに分別し、そのなかの小乗に對しては、

「夫一切衆生、作<sub>レ</sub>諸惡<sub>二</sub>者多、行<sub>レ</sub>衆善<sub>一</sub>者少、繇<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>、願諸佛先教以<sub>レ</sub>勸善懲惡之法<sub>一</sub>、謂<sub>レ</sub>之入天教<sub>一</sub>、所謂小乘是也」  
 【宗統八祖傳】三二丁）

といい、善と惡とを立てて、善を取り惡を捨てるの教である。いわゆる分別の上の善であつて、有漏の善業を勸むる教であるから、入天の樂果を求むる入天教と稱するものを小乗というたのである。次に中乘に對しては、

「善惡共捨、不<sub>レ</sub>造<sub>レ</sub>諸業<sub>一</sub>、謂<sub>レ</sub>之中乘<sub>一</sub>也」(同上)三二丁)

といい、善惡の分別を共に捨てて、ただ無我無心に至る教で、これを無漏の善といい、絶對善であるから、これを小乘の阿羅漢果ともいい、或は更に進んで大乘の眞空無相、無爲無作の教と見ても良い。次に大乘に對しては、

「不<sub>レ</sub>拘<sub>レ</sub>善惡<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>事事無碍境界<sub>一</sub>、如<sub>レ</sub>虛谷傳<sub>レ</sub>響、謂<sub>レ</sub>之大乘<sub>一</sub>」(同上)三二丁)

といい、これは無我無心のところより、不思議に、緣に應じてあらわるる没蹤跡のありさまをいうたもので、妙假妙用のところというても良からう。

かくの如く、佛敎の教理を大中小の三乘に分け、善惡の二法に對する考え方を説明したのである。すなわち小乘敎は善惡の二法を立て、勸善懲惡の趣旨に依つて説かれたもので、これを廣くいえば、迷悟染淨の二法を立て、その間に取捨憎愛の二念に依つて分別する相對の敎といわねばならない。然るに中乘敎に至れば、それらの分別を捨てて、ただ眞空無相のところに達する心境を示したもので、有爲有作は盡く造作であり、造地獄の業と見たものである。故に、これは小乘の極果とも見られ、また自證の極位ともいふべきもので、佛敎の理想は、これにて充分に盡きていられるけれども、更に、これが衆生濟度の方面に出で、妙假妙用となつて、日々の所作が任運無功用に云爲さるる事事無碍の境界を大乘と稱したものであろう。喩えば明鏡の影を寫すが如く、吉凶禍福の萬像を宿すといえども、その心境には、更に蹤跡なく、相即相入、無碍自在なるところを、愚堂は、佛敎教理の大乘的理想と見たものといふのである。

しかし、これは教内の説明であつて、我が祖宗門下に於ては然らずといひ、教の外に禪の別傳することを、強く次ぎのようにいうている。

「吾祖師禪不然、無<sub>レ</sub>關<sub>ニ</sub>上來許多般<sub>一</sub>、別有<sub>ニ</sub>向上宗乘一路、千聖不傳底事<sub>一</sub>、僧云不恡<sub>ニ</sub>慈悲<sub>一</sub>、願示<sub>ニ</sub>向上一路子<sub>一</sub>、師云、汝祇起<sub>ニ</sub>大信<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>願<sub>ニ</sub>喪身失命<sub>一</sub>、絶後再蘇來向<sub>レ</sub>汝道、僧涕泣遂有<sub>レ</sub>得<sub>一</sub>」(同上)三三丁

禪は口頭で以て説くものではなく。また文字を弄して顯わすべきものでもない。いわゆる口頭禪や文字禪を嫌つて、ほんとうに大死一番底のものにあらずんば、禪は語ることが出来ないといふのである。

大死一番底には、先ず大信根を起し、大疑情を以て當たらねばならん。故に、愚堂は「汝祇起<sub>ニ</sub>大信<sub>一</sub>」と説いている。大信とは、眞に箇の一大事あることを信することである。佛祖の言の僞りでないことを堅く信することである。佛祖はみな「不<sub>レ</sub>願<sub>ニ</sub>喪身失命<sub>一</sub>、絶後再蘇來」の眞實を示し、必ず大憤志のもとに勇猛精進して見性しているという事を、はつきりと知り、そこに、自己も、それに向つて専心専念して、大死一番、大活現前せよと説き勧めたものがある。

ただ一向に、禪には「卽心卽佛」を説くけれども、そこには血滴々の修行のみに依つて證せらるるので、その微妙なる深旨に至つては、愚堂も次ぎのように、上皇に答えている。

「上皇問、古人言、卽心卽佛、是否、師對曰、若道<sub>レ</sub>是則人人聽<sub>レ</sub>之未到<sub>ニ</sub>是處<sub>一</sub>、若道<sub>ニ</sub>不是<sub>一</sub>則大梅因<sub>レ</sub>甚言下悟去、此間宜<sub>レ</sub>進<sub>ニ</sub>叡思<sub>一</sub>、上皇又問、迷人<sub>ニ</sub>與悟人<sub>一</sub>死後如何、師曰、山僧迷亦不<sub>レ</sub>死、悟亦不<sub>レ</sub>死、上皇無<sub>レ</sub>措<sub>一</sub>」(寶鑑錄)中卷(二丁)

實に理論を避け、當位卽妙なる答は、愚堂ならではの出来ないことで、禪の妙味は、寸鐵よく人の心を射ることにある。豈、教者の千言萬語の及ぶところのものではない。

## 八

次に愚堂の傑出する第五の點は、禪宗の住持として、實にりつばなものであつたということである。私は嘗て住持として心得べき三條件を説いたことがあるが、愚堂はその三條件を十二分に果したといふべきであつた。すなわち、その第一は布教傳道である。その第二は伽藍の維持である。その第三は佛子の養成であつて、佛種を斷絶せしめなかつたことである。

第一の布教傳道は實に、その良ろしきを得たもので、上は王侯貴族より、下は萬民卑賤の人に至るまで、よく教化が及んでゐる。愚堂の王侯貴族に對する事蹟は『年譜』に委しく出てゐるけれども、萬民卑賤に對しての教化はあまり出てゐない。しかし、今日、細自の大仙寺や、和知の正傳寺の信者の間に傳つてゐる愚堂の逸話や傳説から考へて見ると、卑賤のもののがままに、「地獄は有るぞ、妖怪は居るぞ、幽靈も出るぞ」というて、それを良く救うて、導き、幼兒に嚙んで勸めるような婆心を加へ、病人があれば、病氣を封じ、農民が沼田に蛭が居て困れば、蛭を封ずるといふように、よく面倒を見たものであつた。

また第二の伽藍の維持は、主として頽廢せる寺院に住し、或は無住の寺院を取り立てて、りつばな維持法をも考へられた。小島の瑞巖寺、和知の正傳寺、細自の大仙寺を始め、美濃の少林寺、眞正寺、大通寺、瑠璃光寺、定慧寺、中川寺、伊勢の龍雲寺なども、みな愚堂の興したところであり、また新寺建立としては、豐後の養徳寺、伊勢の中山寺、江戸の正燈寺の如きが、それであつた。

また第三の佛子の養成は、その法嗣として『宗統八祖傳』に、次ぎのように説いてゐる。

「嗣師法一者、法雲大疑、少林體道、寒山瑞南、正傳紹同、永源一絲、長藏闍嶺、聖澤旭窓、大仙泰翁、正燈崇

山、瑠璃光達闢、華山雷峰、眞正安山、慈溪密雲、建國大輪、中山風狂、十五人也、如深川錐翁、雖不登本山籍位、受師授記、而其道稱于世、他家英衲、見佛密契者、亦不爲鮮也」(『宗統八祖傳』三五丁)

川上孤山氏の『妙心寺史』に於ては、これら十五人を以て、愚堂派下の十五哲といい、なおこの外に、愚堂派下の三首座を擧げている。すなわち至道無難と錐翁、慧勤と梅天無明との三人である。これらの三人は、前の十五哲よりは、或る意味に於ては傑出した人物である。殊に至道無難は、その法嗣に正受老人あり、正受老人の法嗣に白隠慧鶴が出たので、この法系最も後の時代に榮えて有名である。故に『宗統八祖傳』の冠註にも、

「本傳逸至道無難祖師、其爲遺憾矣、蓋師性不通方、莫與時合、唯韜德養道、不藉本山、由之然乎、後九十五年、明和七年九月前堂職追贈、其韜錫厚可知矣、正受老人其他四人、亦如是、今時無慚徒、深可鑑之也」(『宗統八祖傳』三五丁)

錐翁は江府の瑞岳寺に在つて、至道庵の無難と蘭菊の美を競うたことは『妙心寺史』下卷一六丁に記している。また梅天無明は『正法山宗派圖』には、「未詳師承及追贈無師承者」のなかに入れてはいるけれども、これは明かに愚堂の法嗣である。『寶鑑錄』の道號のところにも錐翁、至道、梅天の順序に依つて書かれている。また近時、『養徳通鑑』の一書を得て讀んで見ると、その附録に「無明行業記」が載せてある。實に傑出した人物であると思つた。

また一面、『正法山宗派圖』に依つて見ると、愚堂派下に十八人を列記している。すなわち、完道慧全、至道無難、一菴元守、雲南應悅、大輪宜廣、密雲玄密、安山玄永、雪潭豐玉、雷峰如默、達闢禪達、旭隱景暉、泰翁良儉、崇山源清、一絲文守、絕同永奇、瑞南卜兆、體道宜全、大疑宗悟である。なかにも妙心に瑞世したものは、雪潭、旭聰、泰翁、崇山、絶同、瑞南、體道の七人と、永源に瑞世した一絲とは紫方袍を賜わりしものといわれ、國師號は、一絲の定慧明光佛頂國師一人のみであり、禪師號は、崇山の太光慈照禪師と、瑞南の大機妙用禪師との二人のみ、そ

の法孫としては、絶同の法嗣に玄門道幽あり、法光明幢禪師と謚せられ、また體道の法嗣に洞天慧水あり、慈照妙眼禪師と謚せられている。

また鈴木正三も愚堂派下の人であり、居士として幾多の人を出しているが、今や紙數も超過したことゆえ、ここに一先ず記述を略す。要するに、愚堂その人は、晩年まで、法の爲めに東奔西走し、偉大なる足跡を残して、萬治四年、すなわち寛文元年と改元せられた十月朔日に遷化せられ、その翌年、大圓實鑑國師と謚せられている。來る昭和三十年には國師三百年の正當でもあり、更に意を新にして、その足跡を慕いたいものである。

(昭和三十三年十月一日記)